

本人

大至急本人を!

スーパーバイザー
松尾スズキ

vol.

09

ひろゆき

(2ちゃんねる、ニコニコ動画)

「世界の仕組みを解き明かしたい」

堀江貴文

「就職しないで生きるには」

卯城竜太(Chim↑Pom)

「ピカッの僕からピカの君へ」

北村道子

「私の身体論」

岩井志麻子

「因業な母親の告白」

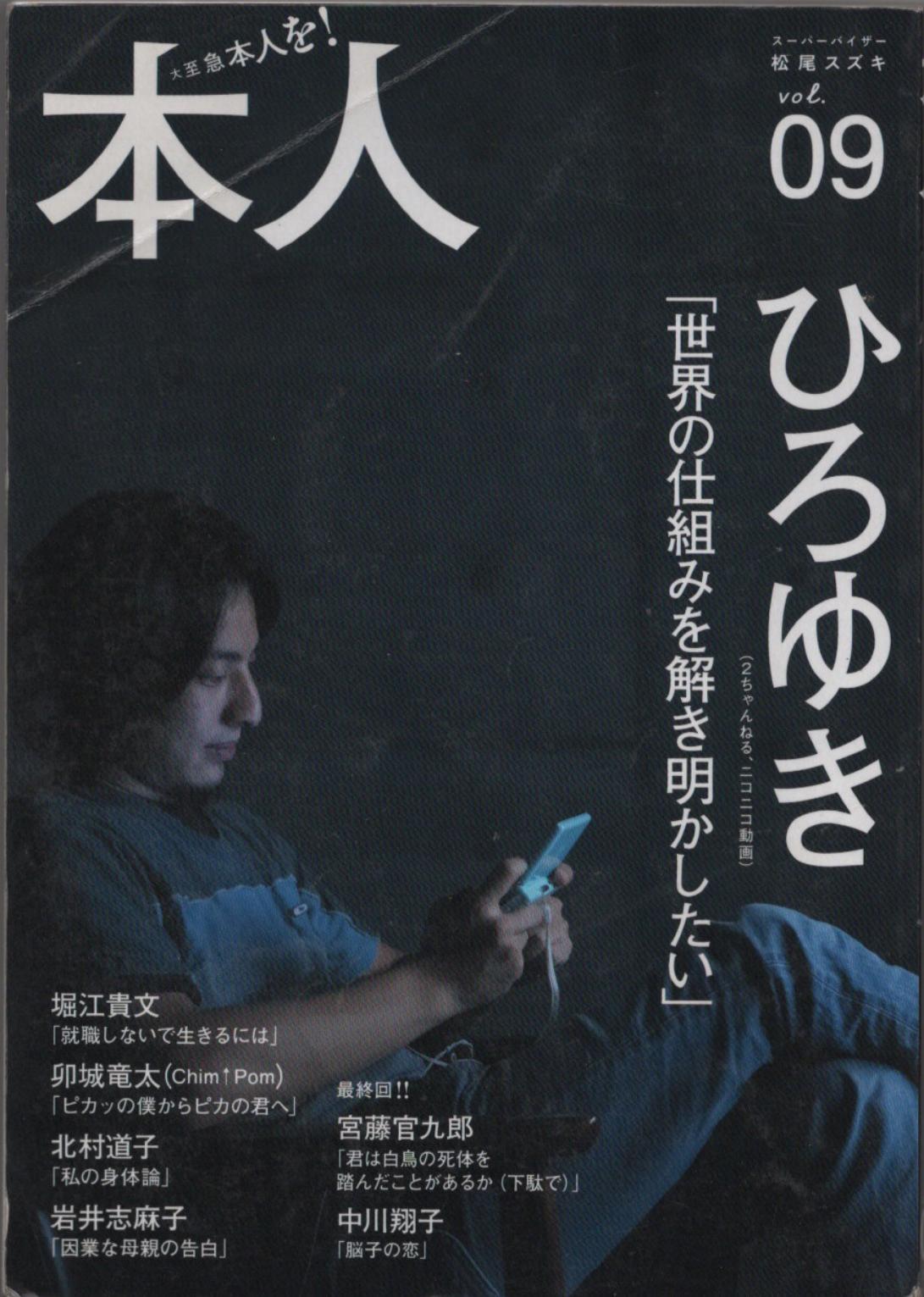
最終回!!

宮藤官九郎

「君は白鳥の死体を
踏んだことがあるか(下駄で)」

中川翔子

「脳子の恋」



ピカッの僕から

卯城竜太
(Chim↑Pom)

序

手紙の依頼が来た。おかしな話だ。自分が思い立ってこそ手紙ではないか。依頼された「はい」と安請け合いをしてから宛名を捜し、かけたい言葉を絞り出し、では「拝啓」と始めてみても、なかなか筋の通るものではない。しかも「被爆者への手紙」と言われてああそうですかと、そんなに軽く筆が進むような相手ではない。畏れ多くも被爆者だ。どれほどに達観していようが、「親愛なる」とたやすく呼びかけられるような相手ではない。そもそも僕自身がそんな格の人間ではない。三十路に入ったばかりの青二才で、別に広島や長崎の出身でもない。そんな僕が被爆者に宛てて手紙を書くなどと、「騒動」の当事者としてみても、これは何とも酷なお題目だ。文艺誌と

はこんな荒技を使うのか。「騒動」を喰らつけて来た編集部の、まさにハイエナのような団々しさたるやこの上ないが、その企みにこんな見切り発車で応えてしまふ僕の身軽さも、軽率で無鉄砲この上ない。何せこれは前轍を踏みかねない「騒動」のスピオフ、まさにガチンコ企画なのである。

そもそも、被爆者——そういうジャンルはあるにせよ、「拝啓・被爆者様……」と、皆をひとつに括れるような、そんなチームワークがあつての彼らではない。「被爆家の皆様」や「被爆部のみんな」「被爆組の方々」というわけにもいかないのである。困ったものだ。「原爆被害者団体協議会(被団協)」の皆様へ、出来てもこれがやつただろう。しかし被爆者団体もさすがにその立場を代表してはいるが、それをもつて「被爆者」と括れるほど、どうも多くの被爆者たちはまだ割り切れてはいないよう

なのである。それを当の団体職員の口から聞いたのだから、それはやはりそういうことなのだろうと思う。被爆者は本当に複雑だ。何せ一発の爆弾に対し、数十万人の被爆体験が異なっていて、その数だけの人生が狂わされたのだ。元よりひとつに記号化出来るような存在ではない。

こんな話を聞いた。

一九四五年八月六日、姉とふたりで縁側に座っていた当時七歳の少年は、空がピカツと光ったまでは覚えている。運良く彼のそばには遮蔽物があつたようで、気がついた時に家の下敷きになつてはいたが、助かっただろう。しかし被爆者団体もさすがに姉弟の距離がどれほどのものであつたといふのだろうか。他にも、偶然じやんけんに勝つていたからその場にいなかつた、何秒遅れていたから助かった、日常にありふれ

たそんなわずかの差で、生も死もやけどの具合も違っていたのだ。放射能汚染もしかりである。とにかく一律に語れるほど被爆者は単純ではない。人によっては思い出すことすら暴力的で、とても話せるようなことはない。これが現実であるかぎり、あの不可視の地獄や声なき声は、僕たちが積極的に読み取らない限り保存することは出来ないのだ。そして被爆者の高齢化を鑑みて、僕たちの被爆体験を想う想像力は、今後ずっと問われ続けることになる。しかしそれは一重に「では……」と決意を表明すれば安泰たるようなことではない。決心とともに、僕たちはその想像力を絶望する運命も持ち合っているのである。それが僕たちの想像を絶する現実であったことは自明のことだからだ。残念ながら人間の想像力は、現実が入り込むことでその無限性には規制がかかるようになっていている。その光によつて数万人がキノコ雲の一部となつたなんて嘘のような現実よりも、モーティーへの思いの方が、自由に果てしなく膨らんでいく。「ピカッ」と光つたその一瞬に、その光によつて、開かれた海を想像する方が、ま

だたやすいのである。

「ヒロシマの空をピカッとさせる」。二〇〇八年十月二十一日、文字通り広島市上空に飛行機雲で「ピカッ」とライティングをしたChim↑Pomによるビデオパフォーマンスの作品は、その軽薄さからも明らかなように、Chim↑Pom／被爆者、その両者の稀薄な繋がりを公にしたものである。「光」というとどことなく芸術的で美に富んで抽象的で聞こえは良いが、僕たちの「光」は効果音で表現されるといったことからも、これは相当にマンガチックな作品である。実際に軽いし痛みがない。だから「痛みをわかっていない」との罵詈雜言が巻き起こったのも、当然の結果だろうと思う。しかし実際に僕は現場で雲を見ていたが、あれはもつとも作品を鋭く理解しているし、「ふざけていい」との罵詈雜言が巻き起こったのも、やがては自分たちに謝罪をした。これが「騒動」の一連である。そもそもピカという言葉は擬音であるのと同時に、原子爆弾を表すスラングの傑作「ピカドン」の略称でもある。庶民が作ったこの言葉は、戦後、被爆者のことを指す蔑称、差別用語となつて、日本の歴史上もつとも重い意味を内在する言葉になつていった。「原子爆弾」という科学的な正式名称に比べて「ピカドン」は、その瞬間に被爆した誰もが、それを「原子爆弾」だと知らなかつたことを語源としていることからも分かるように、ふたつの言葉の違いはとてつもなく大きい。「原

子爆弾」は「アトミックボム」と訳せるが、それをなして歩いていた。そのどれもが普遍的な話である。それを当の団体職員の口から聞いたのだから、それはやはりそういうことなのだろうと思う。被爆者は本当に複雑だ。何せ一発の爆弾に対し、数十万人の被爆体験が異なっていて、その数だけの人生が狂わされたのだ。元よりひとつに記号化出来るような存在ではない。

今は部屋に乱雑に転がっている。コーナー

別に本棚を整理するような、几帳面な親の遺伝子にはどうも恵まれなかつたようで、

僕は整理整頓を怠つてつい物を失くしてしまつたりする。だからあれほど一目置いていた『広島・長崎』も、実はその存亡が危ぶまれていたのだが、本棚から崩れ落ちて出来た山の一角に、その無事は確認出来た。

エロ本やマンガに挟まれて、CDや工具、服に蔑ろにされながら埋まっていた。都合宣言したいのである。僕は親の干涉とは無縁に生きる、ひとりの大人になつたのだ。

夢を描いて成長し、女を寝床に誘い込み、トラウマも忘れんばかりに日々の生活に没頭する、そんな男になつた僕にとって、ものはやオナニーの罪悪感などはもうただ遠くすぐつたい面影だ。彼女の目に射抜かれた青臭いアップさえも、親の干渉とともに今や思い出となつて美化されているのである。

そんな僕が目の前にした彼女は少し古くなつて黄ばんではいたが、当然のよな相変わらずさをたえでいた。でもその印象は、僕の臆病の権化であつたあの偉大な恐

怖に訴えかけるような強制力はない、どこか同情的で、もつと懐かしいものだった。

それよりも僕の頭は、ふたつの違和感と疑問に捉われていた。これまでこの写真集に

何回もあつたが、どうも不思議なことに

彼女と他の場所で遭遇した記憶がまったくない。何せ錆々たる原爆写真をおさえて表紙を飾るほどの一枚だ。見かけていないはずがないのだが、もしかすると自分

の記憶の薄情さゆえの違和感か。そう思う

うとどうも腑に落ちないのである。その謎を解明すべくまずはページをめくつてみると、

なんとさつそく一枚目にして、また、表紙用の彼女が再登場する。表紙用のトリミングがなされる前の、正規の写真が見たかっただがそれは後だ。とにかくこれは相当な彼女オシだということが読めてくる。そ

の横には丸ごと一ページ、黒地に白抜きで編集部から読者へのメッセージが記されて

いる。

あの日

この子の目の前で

起きたことを

知つていただきたいのです

あなたに

そして

日本の子どもたちに

全世界の人びとに

この一文をもつて、編集部は例の目がこの本のA面なることを高らかに謳つてている。

僕が彼らの策略にまんまとまつてたことがよく分かる内容だ。それも丁寧に「日本

の子どもたちに」とまで言い切つて、ターゲットを当時の僕たちに絞つて。本

作りとはかくあるべしとの説得力を持つた見事な実績だ。

一方、正規は一〇六ページに登場する。しかし顔のアップで記憶が形成されていた

僕にしてみれば、これもまた「はて?」と

違和感を覚える一枚である。これは母子の全身像だ。顔に包帯を巻いた母親が自分の横にいる子ども(彼女)とおにぎりを持つて並んでいる。この時代、写真撮影がある

種特別なイベントであつたろうことが分かるような慣れない表情で、ふたりともただ

真っ直ぐにつつ立つて。左側にいる母親は左手におにぎりを、右側の彼女は右手におにぎりを持っていて、申し合わせたか

のような左右対称なのだが、母親は空きの

手のやり場に困つたのか、彼女の防空頭巾を後ろからちよこんとつまんでいる。それがまた何ともいえない愛情を醸し出していく。とにかく写真としては完璧な一枚なのである。しかし例の謎が解けたわけではない。僕は目的を果たすべく、注意深く表紙と正規を見比べてみた。するとどうだろう。相当に微妙だが、ふたつを見分けるポイントが存在するのではないか。正規の彼女の首がわざわざ右に傾いているのに対しても、表紙は真っ向からレンズのこちら側を見据えている。うつかり見過ぎてしまふほど

の相違点だ。もしかするとカメラマンはこの場で二枚撮つたのではないだろうか。憶測に過ぎないが、まず、「母子像」を撮りたくてカメラを向けて、一枚撮つた。そこでこの子の目の良さに気がついて、アップでさらにもう一枚撮つた。そして前者は記録写真として世に出回つて、後者はメッシージとしてこの本の表紙を飾つたのだ、つてことでどうだろうか。と訊かれても、誰も返答のしようがなかろうが。何しろ読者にしてみれば一文の値打ちもなかろう推理である。でももしこれが正しければ、僕は「記憶の薄情さ」を冤罪にもちこんで清算

出来るのだ。ということでこれを裏付ける証拠を擧げるべく、さらに写真を読んでみようと思う。写真の右側には説明書きがある。「▼長崎市内電鉄路線際の路上で、救援隊から炊き出しのおむすびを手渡された母子。すぐ食べる元気もないよう見えた」。日付は八月十日。まだ戦時中ではないか。それ以前に、長崎といつたらまだ被爆の翌日である。長崎といつたら……。確かに……はて。どうやらこの写真は広島のものではなかつたようだ。すっかり広島だと思いつ込んでいたのだ……が、とすると、

そういうことになるか、と、はたと気づいたことがあつて僕はハツとした。写真の相違点を探すなんてことよりも、まず明らかになる真相があるのであつた。何度も広島の資料館を訪れていたことから、僕はそこで彼女との再会がないことに疑問の一端を感じていたのだが、そもそもそこにはないのだ。長崎なのだ。そしてそこに思いを馳せてみると、すべての因果関係は嘘のように繋がつてくるのである。何と僕は長崎に行つたことがない。したがつて長崎の資料館にも行つたことがないのである。恥ずかしながら、これは驚きを超えてはや新

鮮な真実だ。要は自分の怠惰が事の真相だつたのである。なるほど、どう開き直つてみても裏返ることのないような、納得の結論である。それにしても僕は子どもだったとはい、どうも思い込みが激しかつたようだ。しかも広島の資料館に何度も赴いたことがあるなんてセコい実績をもつて、原爆を知つたようなことを、これまで一体どこの口が言えていたのだろうか。ふてぶていわ。さらにこの原稿で自分の勤勉を知らしめようと、そんな浅はかな策略を練つていたこと、この虚榮心はどうしたものだろうか。策に溺れるとはよく言った。危うく我が身をねつ造してしまつところだった。

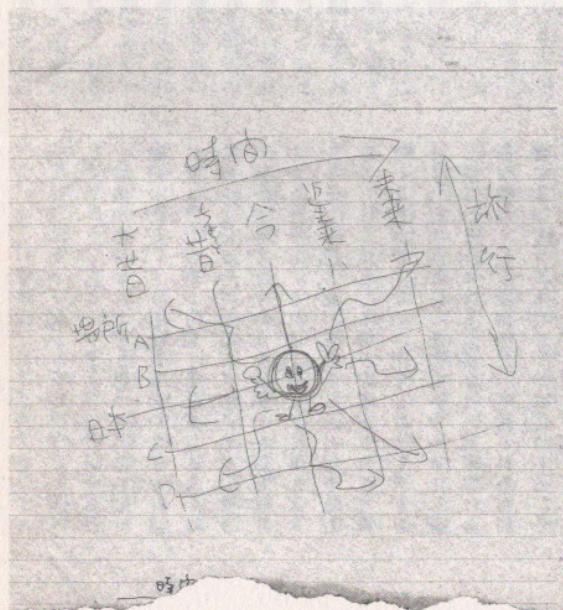
思い込みといえばもうひとつ。先述した違和感のふたつ目である。先ほどから僕は、彼女彼女と、偉そうにナンパの相手かのよう「彼女」を呼んで皆に紹介していたが、そもそもこの子が女子だという証拠はどこにもない。防空頭巾がロン毛に見えるからといって、そこから先は例の強い思い込みなのである。しかし頭巾を取つたら坊主だということだってあり得ない話ではない。これは恐ろしい仮定である。何と言つてもこれまで述べてきたこの子の視線の特別さ

た話なのである。それが全部ひっくり返つてしまふような大事だ。まあ確かに、原爆といった深刻さを鑑みた時に、そんなことはどうでも良いというのももちろんで、それは雑念だと指摘されるまでもなく僕もそう思うし、そう感じたいのだが、それでも、やはりこれはどうにも致し方ない。何せ僕は女子の目を意識し始めたのが超早かったのだ。この本は僕が三歳の時に発売されてゐるが、人の性、とでもいえようか、とにかく僕は物心がついた頃には既に女子にどう見られるかを気にしていた。だから「可哀想な広島の女の子」が実は「たくましい長崎の男の子」だったなんてことは、事実だとしても認められることではないのである。同じ被爆者ながらこれは雲泥の差だ。

……、「なんて、あつてはならない世界を想像し、彼のたくましさを学んでいたのである。男とはそういうものだ。いくら状況が凄惨を極めた原爆だったとはいえ、その憧れを不謹慎だと思ったことは一度もない。まあこれはマンガと写真という違いもかなり大きいだろうとは思うが、とにかくこの歳になって、ここにきて、困ったことに、いろんな前提がガラリガラリと崩れていくてしまう。きっと彼女を知ろうとすればするほどこの崩壊は加速するのだろう。むしろ無知のままの方が良かったのかもしれない。何しろ一方的に思い込んでいたあの頃の方が、皮肉にも、彼女や原爆と僕との距離は近かったのである。

は英語が第一共通語のようになつてゐるの
で、アジアでもヨーロッパでもとにかく上
下どこへ行つてもそれでコミュニケーション
を図ることになる。しかし僕の英語は「なん
な」から毎度挫折感を植えつけられて帰つて
くる。そして次こそはと英語力の向上を心
に誓うのだが、帰国して一週間もすればそ
の志は泡沫のごとき幻影となつて、あつと
いう間に薄らいでいつてしまふ。何しろ
「今」と「日本」という軸が交わる点の上で
の生活は、まるで英語を必要としない。こ
れで拙い語学力が成長するなんてことはあ
るはずがなく、結果、僕は毎度の前轍を踏
んでしまうのである。

これと同様のことが縦の時間軸にも言え
る。「日本」という横軸を左に進むと「過去」
なわけだが、被爆体験などを聞く度に僕た
ちはそこにトリップする。そして今後の心
覚えに被爆体験の伝達などをやはり心に誓
うのだが、これも「今」に帰つて間もなく
のうちにどうも不感的になつてしまふ。や
はり「今」の「日本」での実生活に、歴史が



通していると威張つてみてもいいだろと思う。縦軸と横軸を切つたり曲げたりすることで、時空や異次元を作り出したりする作品を未来に残そうとする、否が応でも未来人とのコミュニケーションが必要になつてくるし、そして英語で乗り切れる前提に未来は立っていないから、過去から普遍的なコミュニケーションを学ばなくてはいけなくなる。しかしこれは誰にでも言い得ていることであつて、別に過去や外国は芸術家のみに開かれているようなものではない。それどころか、今やすべての日本人はアクセス可能な状態におかれていって、グローバル化やアーカイブ化の進化によつて、むしろそれは無限に広がりつつあつて、グッと身近になりつつある、そんな状況なのである。例えば外国人とのコミュニケーションは、今や英語の克服を前提にはしていない。逆に日本にやつてくる物好きな外国人もたくさんいるのである。そんな日本に暮らす外国人に、逆に日本語でもつて大きな態度に出たとしても、これは先生としてのありがたい教えだと思えば意外やもつ

「そろそろこの理論を彼女に置き換えてみようと思う。彼女は写真という残り方で「今」にメッセージを伝えに来た「過去」からの留学生だ。僕たちはおーおー、yeayea と出会ったのちに、ふたりで記念に何か、となつたら、記念撮影も良いけれどせつかくだからブリクラで……。といった彼女の初体验をセッティングする運びと相成つて、この章の冒頭に繋がっていくのである。今やブリクラは友情確認には欠かせないツールだ。世界に誇る我らの文化、とい

先生を待っているはずだ。そうだ。みんな
怠惰な癖くせに多くを望む若き日本人たちよ、
諸君は、いまだかつてなく開かれた世界の
主体者たる可能性に満ち溢れているのだ。
恐れることなく我らの文化を信じようでは
ないか。

いうちに打つとする。

いうちに打つとする

○



が何をもつて従来の記念撮影と一線を画すのかというと、それはまさにアミューズメントとして成り立つてることに尽きるだろ。これほど写る喜びが要求される写真はいまだかつてない。僕などはカーテンをめくった瞬間から、そのブレッシャーに押し潰されそうになる。喜びは、被写体に全部が委ねられる能動性と、隔離された空間性によってオートマチックに促される。そしてその声なき声にいたたまれなくなつた被写体は、さらに自ら進んでその要求に従うようになるのである。こんな仕組みで成り立っているプリクラは、実は現場ではさほどのが高まりがなかつたとしても、落書きやボーズによつてその仕上がりを決定的に楽しくすることも出来るのだ。それぢや説魔化しだ、と、そう邪険に決めつけないでいいただきたい。何しろこの緩い融通の下にお

もさぼることが出来るのだ。素晴らしいで
はないか。まさに「幸せ発生・記録装置」
とも言える夢のカメラなのである。だから
ブリクラの良し悪しは空氣で決まる。楽し
そうか、否か。それだけだ。にしてこの胡
散臭い享楽つぶりはどうしたものか。——
幸福の無理強いが痛々しい、ゆえにここに
ある享楽が演劇的であることを曝け出して
いる。——というコンセプト？ 馬鹿な。
テンションなくしてそんなものは、友情の
足しにはならないのだ。もちろん僕はわり
かし楽しかったけど、喜びが一方的である
以上、やはりブリクラでそれを良しとして
はいけないのである。ひとつ前の部屋にふた
りきり、個室にそんな対人意識が働く限り
は、「場の共有」が孤独であるというのは
寂しいことだ。どちらか一方からの喜びの
押し付けを意味してしまうことになる。支
配と服従が写真に独りよがりな印象を与え
るだけなのだ。独裁者が孤独だというのも
もはや自明のことだけど、それはきっと、
相手を「分かつたつもり」でその場を「作つ
てあげた」という気になつてゐるからだろ
う。上下関係はひとつつの場を共有するところ

だから生まれ、その場をどうするかを誰か
どう決めるかによって固定化していく。要
するにこの一枚のプリクラという場において、僕は良かれと思ってふたりの喜びを演
出するためには、彼女を支配して、また、彼
女に服従を強いたのである。楽しそうな世
界を作り出すために、彼女をプロデュース
したのだ。しかしそれがいくら独裁的だっ
たからといって、きっと僕が反省を迫られ
ることはないとと思う。だってもし彼
女にすべてを一任していたら、きっと僕た
ちは一枚のプリクラすら残せなかつた。何
せ残念ながら彼女には意思がなく、そして、
命がないのである。ひとつ目の場を共有しよ
うにも、悲しいかな僕たちには絶対に埋ま
らない溝がある。生命の差。時間の差。外
国人と違つて歴史はどうにも一方的なのだ。
彼女への恐れも同情も、すべて僕の想像に
過ぎないのだ。例えば彼女と今後も逢瀬を
重ねたとする。そして芽生えた愛情が僕の
中で順調に育まれていく。この自分本位に
して無償の愛が、どんなに本質的で美しか
ろうとも、残念ながら僕が彼女に愛される
ことは決してない。僕たちはそんな絶望的
な運命の下に、最初から引き裂かれている

のである。だからそれを打開する術はただ順を強いることだ。それによつてのみ僕たちはひとつになるとが出来るのだ。ダッチワイフしかし、フィギュアしかり、全部独裁者の愛像力を運命づけられている。そしてそれは作家活動にも同様に言えることで、場を、作品を、時間を作つて発表するということは、すべて「相手を『分かつたつもり』」で、それを「作つてあげる」という、他者への想像力をわがままに駆使してのいかにも独裁的な行為なのだ。もちろんひとりで絵を描いて特定の相手に見せるくらいなら、その罪を背負う必要はまったくないが、それでも制作というものは自分勝手な思い立ちは端を発している。それを一般公開する以上は、やはり「良かれと思った独裁者を自認すべきだ。なのに作家は、ことと原爆を前にすると、その独裁的な身分を認めようとはしなくなる。被爆者への想像力がそのままに發揮される？ 違う！ そんな一方的な前提は茶番に過ぎない！ 本音は何だ！ 認めればいい！ 独裁者にはなりたくない！

そしてそもそも原爆被害は絶対に想像が出来ない。それは自分の限界を認めざるを得ない事実ではないか。それなのに想像力こそが作家たる強さだとそれを誇示する天才どもは、その完全なる敗北の運命を恐れ、諦め、それを遠慮という良心のフリをした保身的な諦めにすり替えて、自分の無力を正当化するのだ。そしてそのレイヤーの積み重ねの中で、結局は誰も原爆に踏み込まなくなるのである。そんな中でも果敢に表現された数少ない原爆芸術でさえ、やはりその多くが遠慮がちでうそ臭い。どんなに芸術的だとしても、作家と原爆の関係が社会を書き出すような、素直な作品にはなかなか出会えないのだ。

Chim↑Pomは、想像も出来ない、そして諦めきることも出来得なかつた上に、がらん通りに口が減らないカバチタレだ。でも原爆芸術を自ら諦めるなんて自殺行為には賛同できない。それは原爆を被害者の問題としてのみ捉えて配慮して、自分や人類と切り離していることを意味しているからだ。「自分と原爆」の関係から目を逸らすことは、被爆者云々と説く前に、自分にもつとも身近でたやすい想像力が働いていた

「原爆」に「無関心」でいるのは誰だろうか。世界中の人に言いつけていいそうだが、それは「今」の「日本人」にも通用することだ。どれほどの日本人が被爆者団体と協調していると言えるだろうか。もはや今の日本は、僕も大人になつて、彼女の視線を忘却の彼方に追いやつた。チャラくて楽しい人生を

——愛の反対語は憎しみではなくて無関心だ——

平和と原爆が透明化する今を、こんなに言ひ当てる言葉はないだろう。確かに僕も大人になつて、彼女の視線を忘却の彼方に追いやつた。チャラくて楽しい人生を

マザーテレサはこういうことを言つている。

——愛の反対語は憎しみではなくて無関心だ——

平和と原爆が透明化する今を、こんなに言ひ当てる言葉はないだろう。確かに僕も大人になつて、彼女の視線を忘却の彼方に追いやつた。チャラくて楽しい人生を

生きた犠牲者への「無関心」や、「想像力の欠如」といった罪も、無自觉という情状の量をもつてその罰をすり抜けていくのだ。ちょうどアメリカの自由と民主主義がそうであるように、通用していくのである。そんな現在の日本を我々は「平和」と呼んでいたのが逆にちょっと貧乏臭いが、とにかく、食っているうち馬鹿笑いにウケて、がつついで、享楽をゴリ押していく。何しろこの無邪気なエゴではしたハメは、自由を裏付ける悪気のなさによって、今や正當性を与えられている。そしてその裏に

世界中の人に言いつけていいそうだが、それは「今」の「日本人」にも通用することだ。どれほどの日本人が被爆者団体と協調していると言えるだろうか。もはや今の日本は、僕も大人になつて、彼女の視線を忘却の彼方に追いやつた。チャラくて楽しい人生を

——愛の反対語は憎しみではなくて無関心だ——

平和と原爆が透明化する今を、こんなに言ひ当てる言葉はないだろう。確かに僕も大人になつて、彼女の視線を忘却の彼方に追いやつた。チャラくて楽しい人生を

生きた犠牲者への「無関心」や、「想像力の欠如」といった罪も、無自觉という情状の量をもつてその罰をすり抜けていくのだ。ちょうどアメリカの自由と民主主義がそうであるように、通用していくのである。そんな現在の日本を我々は「平和」と呼んでいたのが逆にちょっと貧乏臭いが、とにかく、食っているうち馬鹿笑いにウケて、がつついで、享楽をゴリ押していく。何しろこの無邪気なエゴではしたハメは、自由を裏付ける悪気のなさによって、今や正當性を与えられている。そしてその裏に

生きた犠牲者への「無関心」や、「想像力の欠如」といった罪も、無自觉という情状の量をもつてその罰をすり抜けていくのだ。ちょうどアメリカの自由と民主主義がそうであるように、通用していくのである。そんな現在の日本を我々は「平和」と呼んでいたのが逆にちょっと貧乏臭いが、とにかく、食っているうち馬鹿笑いにウケて、がつついで、享楽をゴリ押していく。何しろこの無邪気なエゴではしたハメは、自由を裏付ける悪気のなさによって、今や正當性を与えられている。そしてその裏に

結

就職しないで生きるには

「不況下で企業に内定を取り消された学生や、就職難で不安を抱えている若い人たちへ、堀江さんな
らではのアドバイスをいただけますか?」あのホリエモン氏にそうお願いしたところ、執筆をご快
諾いただきました――。

上がつてきた「ピカ」の記憶や身体は、やはり相当に怖かった。そう簡単に独裁者を許さない広島という場の共有は、支配でも従属でもない、空恐ろしい「にらめっこ」だったようだ。オナニーを見透かしていたような(または痛みを想像していたかのような)、一方的だったお互いの視線が、皮肉にも「ピカッ」騒動を通して絡まりだしたのだ。そして僕たちはお互いの本音を知ることになった。ノーモアチンボム。一方通行の時代はこれをもつてひとつの節目を迎えたのである。ノーモアオナニー。これはきっと来たるべき「愛」の原爆芸術を産み落とすための交ぐ合いだった。ノーモアヒロシマ。そしてここから先が本番なのだ。そんな実感をもつて僕はこの独り言を終わらせるが、それでこの話が終わるわけでは

ないということを、ここに改めて念を押し
ておきたい。人類が芸術的であるかぎり、
平和にガチンコであろうとするかぎりは、
きっと、これからもずっと、「つづく」で
結ばれていく歴史は脈々と繋がっていくの
である。
(了)



●注釈

※1 Chim↑pon
二〇〇五年に結成したアート集団。二〇〇六年に渋谷の野良ネズミを捕獲して、その剥製をピカチュウにして「スーパー☆ラット」で注目を集め、「生」と「死」をテーマにした作品や、社会に全力で介入した作品が多い。「二〇〇七年にはセレブと地雷除去をテーマにカンボジアに渡航し、高級バッグなどを地雷で爆破した「サンキュー・セレブ・プロジェクト・アイムボカン」が広島市現代美術館「新・公募展2007」の大賞を受賞。

二〇〇八年十月、広島市内上空に「ピカッ」の三文字を描いたことが問題になり、十一月一日から広島市現代美術館で開催される予定だった展覧会が中止に。今年二月、広島の騒動についての書籍を刊行。

※2 ただ今編集中の書籍
『なぜ広島の空をピカッときさせてはいけないのか』(河出書房新社)。広島市上空に飛行機雲で「ピカッ」という文字を書いたChim↑Ponの行為から、謝罪会見を開くまでの「騒動」の検証に加え、「ヒロシマ(原爆、平和)」「美術と行政、市民」など、美術の問題にとどまらない社会的命題を、美術評論家やジャーナリスト、被爆者団体など、さまざまな視点からの一冊にまとめた。三月下旬発売予定。予価二五〇〇円。